

J.-J. ルソーにおける自然界の認識

— 考 察 序 説 —

荒 井 宏 祐

J.-J. Rousseau's Perspective on Nature

Hirosuke ARAI

Abstract

This paper elucidates Rousseau's attitudes toward nature, both his range of knowledge about the natural world and his sensibilities toward it. It compares them with those existing in England during the 18th century, and concludes by offering suggestions to help us confront our contemporary environmental problems.

First, Rousseau viewed nature with a subjective, selective, imaginative and recollective attitude. He tried to discover "signs" in nature which supported his critique of the "ancien régime".

Second, one study of Rousseau has argued that his view of nature did not extend beyond the forest. In my opinion, the visual range of Rousseau's mind was so wide and deep that it encompassed even the inorganic world and cosmic laws.

Third, I argue that Rousseau's way of thinking about mountains (including the Alps), the art of garden design, and the life of animals and plants was distinctive and influential in changing the way people thought about nature in the 18th century.

Finally, after examining the applicability of two hypotheses (biophilia and topophilia) to clarify the significance of his perspective on nature, I conclude that Rousseau's charming, vivid insights into nature and strong descriptions of the natural world encourage us today to preserve and protect the natural world.

はじめに—本稿の目的

J.-J.ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712~1778) の著作には自然界の描写が溢れるばかりに満ちており、あたかもそれらは、彼の自然界に対する視界の成り立ちと広がりを探求に向けて、人をいざなうようでもある。

小稿は、ルソーにおける自然界認識の態度特性とともに、その視界の及ぶところを、二つの整理軸を仮設して吟味を試みる。また、彼とはほぼ同時代のイギリスにおける自然観の変遷との比較を例示して、ルソーの視界の背景を成す、自然観の時代状況を探るとともに、彼の自然観研究に

関する今後の課題の一つを示唆する。さらに現代の「自然と人間」観との関連を、「バイオフィリア」と「トポフィリア」の二説を中心に一見して、ルソーの自然界に対する認識の、現代的意義の一端に触れる。

なお今回の考察は、膨大な彼の著作の一部を対象としているという意味においても、第1次的なものである。また引用邦訳名と略記は、本文中に逐次示すほか関連の原著名と略記を、注1に掲げる⁽¹⁾。

I 認識態度の特性と視界の広がり

1 態度特性

(1) 主観性・選択性

R. グリムズレイ (Ronald Grimsley) は、「ルソーと空間の想像力」の中で、「外部世界の見方 (Conception) に自らの個性が深い影響を与えたことを認めた最初の人間こそ、ルソーその人である」(A.J.J.R, tome 39, 1972~77, P.47.) と述べている。この見方の最初の特徴は、ルソーが外部世界を感覚的、主観的にとらえることにある。彼自身「わたしのうちにある感覚とわたしの外にあるその原因、つまり対象、とは同じものではないということがはっきりとわたしにわかる」(今野一雄訳『エミール』(中) 岩波書店、1997年、129頁。以下『エミール』) と述べているほか、ある書簡の中で次のように言っている。

「心を動かされるかぎり見ることができます。無関係なことは私の眼にはなきに等しい (nuls à mes yeux) のです。注意を呼びさます関心に応じてのみ注意を払う」(原好男訳『書簡集』(下) 小林善彦、樋口謹一監修『ルソー全集』白水社、第14巻1985年、以下『白水社全集』、97頁。C.C., tome XV, P.48, n° 2440.)。

A. トリベ (Arnaud Tripet) は、「ルソーと風景の美学」の中でルソーのこの見方を「主観的な相対主義の見地 (la Perspective d'un relativisme subjectif)」と呼び、ルソーの「世界に対する主観的な関係の極端な表現の一つがここにある」(A.J.J.R t.40, 1992, P.65) と言っている。ちなみに、外部世界をこのように主観的にとらえようとする態度は、現代の環境記号論の見方、つまり自然とは、人間と自然との間の「インターフェースに現われた環境から概念的に構成されたもの」⁽²⁾として、自然をとらえる見方と通底するところがある。

ところで自然界には周知の通り、二面性がある。即ち、美しくなごやかで平和的な自然で、人間に友好的、好意的な自然と、大地震などの自然災害や毒蛇、毒虫、毒草など、人間に危害を与える、攻撃的、破壊的な自然である。

ルソーの主観的な自然界把握がより徹底され、ほとんど選択性といってもよい態度特性としてあらわれている点は、管見の範囲では、前者の好意的自然描写の方が、後者の攻撃的自然描写よりも量的に多いと感じられることであろう。噴火、地震、雷害、洪水、旱天などの荒らぶる自然は、『言語起源論』の中での「はるかな遠い昔」における自然界の変動描写にあらわれているが、それは「はるかな遠い昔」である。ヴォルテールはリスボンの大地震 (1755年) に大きなショックを受け、現世の不幸や悪の存在を強調した。しかしルソーは、被害の原因を都市人口の過剰集中と住居形態(「自然のほうからすれば、なにもそこに六階や七階建の家を二万軒も集合させることはまったくなかった」一浜名優美訳「ヴォルテール氏への手紙」『白水社全集』第5巻、14

頁)や財産の執着による避難の遅れなど社会的、経済的原因に求めている。彼はまたこの大地震発生以前にも別の箇所「火事や地震」について「われわれが自然の教訓を軽蔑したことに対して、自然がいかに高い代価をわれわれに支払わせているかが感じられるであろう」(本田喜代治、平岡昇訳『人間不平等起原論』岩波書店、1990年、以下『不平等論』、151頁。)と述べている。『新エロイズ』に、冬の自然の荒涼たる風景描写がいくつか見られるが、これは恋人を失ななかつた主人公の悲哀感とともに描かれており、「ちょうどわたしの心の奥で希望が死んだように、わたしの眼には自然の全体が死んだもののように見えるのです」(安土正夫訳『新エロイズ』(一) 岩波書店、1997年—以下『新エロイズ』、145～146頁)としているのである。

またルソーは「植物にはわたしたちの毒になるものがあり、動物にはわたしたちを食べるもの」(『新エロイズ』(三)、231頁)がいることを認めている。しかし彼は、ごく少量でも毒になる「恐るべきヤナギバグミ」を「十五あるいは二十粒も」飲みこんでも「朝には完全な健康状態で目を覚ました」(今野一雄訳『孤独な散歩者の夢想』岩波書店、1998年。以下『夢想』、125頁)。またルソーが当時滞在していたモチエの村にある城を取りまく「森や岩山には毒蛇がたくさんいる……が、その……いたるところを歩きまわり、……腰を下ろし……だが、今までお目にかかったことがありません。」(前出『白水社全集』第14巻、113頁)と言っている。これらはまるで有毒な動植物は、自然の善性を信じるルソーには被害を与えなかつたり、避けて通っているかのようでもある。前出のA.トリベも「ルソーにあっては自然の荒れ狂う暴力の口調を持つ詩人のイメージは見い出されない」(A. J. J. R. t. 40, 1992, P. 77)と述べている。ちなみにルソーの良き理解者であり、「ルソーが私を正してくれた⁽³⁾」と言った哲学者のカントは、「自然が人間をその特別の寵児として受け入れ、あらゆる動物にもまして親切に好遇したということは、まったくありえない……自然は人間をむしろ、自然の破滅的な作用……悪疫、飢餓、水害、凍害、……動物の襲撃その他において、あらゆる他の動物と同様、甘やかしてはいない⁽⁴⁾」と述べ、ルソーとは反対に自然界の攻撃的側面を直視している。

(2) 回想性

別の態度特性は、ルソーの自然界には、いわば彼が眼前している光景をリアルタイムに近い状態で描写したものであるというよりも、過去を回想した時に想い描かれたものがあることであろう。ルソーは「わたしは自分の記憶の中にしか知性 (l'esprit) がはたらかない……後になって……みなよみがえってくる。」「その時、その場所……大気の温度、その香気、その色彩、その場所固有の印象までよみがえるのだ」(『告白』上164頁、175頁、O.C., t. I, P. 115, P122.)と言っている。この回想される自然界は、ルソーの「快感回帰」とでも呼べそうな心性とたやすく結びつくようで、ある時は、愛する女性たちとの楽しい遊び場所を提供する田園や彼の好きな「めまい」を十分味わわしてくれる、「ディオニソス的自然」の形を取ったり、あるいは晩年の散歩中偶然見つけた「ツルニチニチ草」が一瞬のうちに約30年前のヴェラノス夫人との「本当に生きたといえる」最高の幸福感をまざまざと蘇生させてくれる至福の自然でもあったりしている。我々はこうした多くの例を『告白』や『夢想』などに見い出すことができる。

(3) 空想性・想像性

ルソーが描く自然界は、すでに指摘されているように「空想でふくらんだ自然」で、彼は7歳の頃から「異常なまでの夢想癖、空想癖⁽⁵⁾」があったようである。彼自身も「わたしたちの目

にふれるものに想像 (l' imagination) が魅力を添えなければ」と述べ、「対象がそうなるようにではなく、そうあってほしいように見る。それを選ぶのは想像の自由なのだから。」(『エミール』上、271頁～272頁、O.C.t. IV, P.418) と言っている。もっともこうした空想の、あるいは想像の自然のベースには、実際の自然体験が関与している時もあるようで、友人やその家族などとの湖水めぐりの折に受けた「対岸の景色……の鮮明な印象が…数年後に『新エロイズ』のなか」の描写となった(『告白』中、182頁) などいくつかの例をあげることができる。またこれまでのルソー研究の中には、若き日のルソーが「トリノを高い丘から見下した小さな驚きが、サヴォワの助任司祭の告白の中でルソーによってなされた道徳的啓示を用意したはずである。」との意見もある⁽⁶⁾。

(4) 非実利性

ルソーは、植物界を「食料倉庫のようなものだと考えたことはある。けれどもそこに薬品や医療品をもとめようとは、いちども思いついたことはない。」(『夢想』、113頁) と言っている。すでに拙稿で触れた所⁽⁷⁾だが、彼には自然界の認識にあたって、実利目的に基づく認識の排除が見られる。「すべてをわたしたちの物質的な利害に結びつけ、いたるところに利益や薬を捜しもとめ、いつも健康でありさえすれば、自然をいっさい無関心にながめようとする、そういう考え方は、決してわたしの考え方ではなかった。この点については自分はほかの人たちとはまったく逆だという気がする。」(『夢想』114頁) と述べている。この点は、当時の百科全書派の実用主義的、人間中心主義的な自然観とは、一線を画するものであろう⁽⁸⁾。

(5) 記号性

ルソーには、自然界全体や自然物をいわば宗教的あるいは政治的、社会的な記号を含むものとして見直し、後述のように独自の宗教的観念などを自らに与えるものとして、あるいは文明社会批判など自説の正しさを例証するものとして眺めようとするところがある。この点もすでに拙稿で指摘した所である⁽⁹⁾。例えば土地は、私有化によって制度的には不平等を拡大するものであると同時に生態系を宿す土壤でもあり、これを破壊する文明化は、ますます批判されるべきものであったのである。これまでのルソー研究でもこの点を、自然は「ルソーの思索のもっとも力強いバネであった⁽¹⁰⁾」と表現している。

以上、ルソーの自然界の認識態度の特性として、主観性・選択性、回想性、空想性・想像性、非実利性、記号性の五例を示してみた。以下引用する彼の自然界の描写には、こうした特性が反映されていることをあらかじめ承知しておく必要がある。

2 視界の広がり

(1) 整理手順

ルソーの膨大な著作における、さまざまな自然界の諸相を一定の方式で整序を試みる一つの方法は、プレイヤード版全集の『用語集・索引』⁽¹¹⁾をもとに、関連の字句・表現をその文脈に従って再整理することであろう。しかしこれにはかなりの研究資源と『用語集・索引』編集当局の協力が必要である。第1次の考察であるこの小稿ではそのための準備作業の意味も含め、とりあえず、以下のような二つの整理軸と各三つの項目を仮設し、それらに該当すると思われる語句(ル

ソーの記号的自然の表現を含む)を暫定的に例示してみた。

ア 自然界において自然物などが存在する位置。ここでは地下から地上、天上に至る自然界の垂直的な段階の軸とし、これを「位置的自然」の軸と呼ぶ。これは、①地下(水底)・地中(水中)、②地表(水面)・地上(水上)、③天上の三層に分かれる。

イ 自然界において自然物などが存在する態様(個、集合、全体)。ここでは「態様の自然」の軸と呼ぶ。これは①個物的自然(花や草などの一つ一つまたはそれらの部位)、②集合的自然(何らかの通有性を持つ種や類、属としての①または、異種の①が多様に混在する自然)、③全体的自然(②から成る世界、宇宙や生態系など)の三区分別に分かれる。

最後に、この二軸を交叉させて、ルソーの自然界認識における視界の広がりを実例的に確認する。

(2) 位置的自然

ア 地下(水底)、地中(水中)の自然物の認識

まず化石や地下の鉱物などの指摘があるかどうかだが、ルソーは、「庭の台地をふかく掘りさげていると、化石の貝がら(des coquillages fossiles)」が出てきたこと(『告白』中、152頁、O.C., t.1, P.373)、また「博物学に興味をもっているなら……化石をさがさないで石塚を過ぎて行く気になれるだろうか(『エミール』(下)、124頁)などと述べている。さらに「琥珀(l'ambre) ……などは摩擦するとワラをひきつけること…に気がついた(『エミール』(上)、299頁、O.C., t. IV, P.437)と言っている。このほか鉱山や、鉱物などの地下・地中の金属材料への言及もある(『不平等論』、154頁)。

一方地中については、「土壌の破壊、すなわち植物に適した物質の損失(『不平等論』、140頁)を指摘したり、「化学論」で「全植物の必要物を根に供給するのは、土壌である。そこからまだ未純化、粗製の汁液(sucs)が、そのために奉仕する小さな、数限りない運河のなかで自らを浄化し…、植物のさらに微小な部分部分を養うのに適したものとなっていく」(A.J.J.R, t.12, 1918~1919, P.48)などと言っている。また水系ではまず、水底・海底について「貝殻がばらまかれている」粘土層が「小川の川床(『新エロイズ』(三)、133頁)を成すとか、「大河にふさわしい川床(『新エロイズ』(三)、198頁)などの表現がある。またより豊かな植物標本を作るため「いずれは海の底……のすべての植物(『夢想』、108頁)を採集したいと言っている。一方、水中への言及では、湖の漁で取れた魚を「苦しんでいる生き物」なので「みんな水中に(『新エロイズ』(三)、198頁)戻したり、研究対象として採集しにくいもの一つに「水に住む魚(『夢想』、118頁)をあげている例がある。これらからルソーの視界は、地下(水底)や地中(水中)に及んでいたことがわかる。

イ 地表(水面)、地上(水上)

位置的自然では、この層に属する事例がもっとも多様かつ精彩に富んでいるように思われる。その内容の一部を次の簡単な区分のもとで例示する(出典略)。

- ① 無機的自然 陸系では、「地面と同じ平面にある土」、土壌、土床、地平線、大地、砂、岩、石、断崖絶壁、火山、砂礫、山の空気など。また水系では、「眼に映る広大な水の原」、水面、水平線、氷、波、露、水、雪、雨、滝、水流、霧しぶき、水蒸気など。
- ② 有機的自然 植物系では、花、草、樹木、灌木、森、蔓、葉、枝、苔、木陰、木立、果物など。また動物系では、犬、猫、兎、鳥、狐、牛、馬、羊、狼、山羊、鹿、虎、ハエな

ど。

- ③ 無機物、有機物の混在的自然 陸系では、島、谷、山岳、丘、山腹、山脈、平野、緑野、大陸、林間の空地、大平原など。また水系では、湖、池、沼、河川、泉、海、海峡、水辺など。
- ④ その他（自然現象、景観など） 季節、気候、大気およびその温冷・乾湿、風土、香気、色彩、天候、洪水、地震、雷、旱天、稲妻、噴火、自然の景観、人気のない場所、暴風雨など。

なお、人工の手が入ったものとして、畑、果樹園、噴水、運河、庭園、牧場、田園、動物飼育場、鳥小屋、養魚池、野菜、麦、家畜などがある。

ウ 天上

大空、星、惑星、星座、太陽、地球、天体の運行、宇宙、蝕、朝焼け、日の出、日光、闇、「この世の圏外」⁽¹²⁾ (Au desus de cet atmosphère—O.C., t.1, P.1049、『夢想』、91頁) など。

以上のほかルソーは自然誌、宇宙誌にも興味を寄せた。彼の自然界の認識は、地下（水底）から天上、宇宙にまで及んでおり、位置的自然の三段階をカバーしていることがわかる。従来「ルソーは、風景を賞賛し、熱心に山腹を見たが、その範囲を森林限界以上に広げることは皆無とはいわずともめったになかった⁽¹³⁾」との意見もあった。しかしルソーの視界は、位置的自然の領域でも、もっと広いことがわかる。彼の化石など地下・地中への関心は、19世紀以後の地質学の発展が継承することになる。

なおルソーは、「人間のいる所から上の方へのぼってゆくとき卑しい地上的な感情はすべてそこに棄ててゆくように思われ、清浄界に近づくにつれて魂は清浄界の変質することのない純粋さを持つある物に染まるように思われます。」（『新エロイズ』（一）、126頁）と言って、位置的自然を下方から上方へ向かう上昇感の魅力を伝えている。

(3) 態樣的自然

ア 個物的自然

上記の位置的自然に属する自然物の一部は、個物的自然でもあるが、ここではルソーが個物の一つ一つ、例えば花の内部組織まで、よりマイクロに見ていることを例示したい。「完全な植物は、根、茎、枝、葉、花、果実によって構成」されている。とくに「結実の部位、つまり花と果実」が重要で、「自然はみずからの作品を要約して隠した……この部位によって、……その作品をいつまでも存続させる」（高橋達明訳「植物学についての手紙」—以下『手紙』、『白水社全集』第12巻、13頁）と彼は述べている。ルソーはつづけてユリやエンドウ豆などについて、いわば花の解剖学を講義しており、「植物学はどういう教育においても忘れられています……子供たちの教育のもっとも重要な部門となるべきです。」（『手紙』、40頁）と言っている。その他「植物用語辞典のための断片」（前出『白水社全集』第12巻、89頁～136頁）には、花卉、花柄、葉柄、めしべ、気管などの詳しい解説が、また『夢想』でも「イラクサのオンベ」などの「無数の微細な繁殖作用をわたしは初めて観察した」ことが述べられている。こうした観察は「他にくらべるものもないくらいに異常な」「恍惚と陶醉」をルソーにもたらしている（『夢想』83頁）。

イ 集合的自然

ルソーはまた、上記のような「植物の繁殖器官の営み、…その系統」の観察から「それまでは思いも及ばなかった植物の通有性をみわけ」（『夢想』、83頁）ている。つまり彼は個物的自然の一つ一つの吟味につづいて、より一般的な「植物の構造や組織」の観察を経て、種類としての集合的な共通性を持つ、「植物の通有性」（*caractères génériques*—O.C., t.1, P.1043）を感知していったわけである。

ここでいう集合的自然には、前述の通り、無機物・有機物の混在的集合や、異なった無機物や有機物同志の混合的集合が含まれている。これらのうちとくにルソーが好んだ集合的自然は、A.トリベによると「複数の眺めと気候、今日なら複数の生態系（*ses écosystèmes*）を持つとでも称されるような、山の中腹（*la montagne à mi-côte*）、それ自身が一つの自然のコンパートメントを成している島、水の緑取りのない、ジュリのエリゼのような庭園（*Jardin*）、それに『告白』の若い散歩者か『夢想』の年老いた散歩者のための田園」の四つで、トリベはこれらを「ルソー的な愛すべき場所」（*locus Amoenus rousseauiste*）と呼んだ（A.J.J.R, tome 40, 1992年、P.66～67）。ここでトリベが山の中腹に、「複数の生態系」を認めていることは、後述するルソーの生態系認知との関連で注目される。

以上の四つは、位置的自然の「地表・地上」にも属しているが、態様上の特色の一つは、混在的あるいは混合的自然にある。まず山の中腹についてルソーは「さわやかな木陰のある気持ちのいい丘の中腹（*le penchant*）に…小さな家を……、中庭は家畜を飼う場所…牛小屋……庭園は野菜畑……屋敷の周辺は…果樹園」（『エミール』（中）、301頁、O.C., t. IV, P.686～7.）を持ちたいと言っている。また島に関しては、サン・ピエール島でルソーが坐った「丘は芝草や……花…に覆われていて兔を棲息させるのに適した場所で……わたしが島を去るまえに繁殖しはじめていた」（『夢想』、84～85頁）と述べている。

さらに庭園は、その中にある果樹園には「木陰……緑葉…咲き盛る花々や…水のせせらぎや数知れぬ鳥の歌声」が聞え、「自然界の中で最も未開の…場所（*le lieu le plus sauvage…de la nature*）を見る」（『新エロイズ』（三）、128頁、O.C., t. II, P.471）との描写がある。この果樹園は元は、かなり乾燥した草とまばらな木、とても少ない木陰を持ち、水がなかった場所に手を加えてできたものであった。そのさい人工の手が加わったあとが全く見られないように「非常に注意した」結果、「自然の一切の魅力はここに封じ込められている」（『新エロイズ』（三）、146頁）と感じられるところである。

なお、現代のドイツには、荒れ果てた自然に手を加えて元通り生態系を復活させ、再び生々とした場所に戻した「ビオトープ（*Biotop*）」と呼ばれるところがあると伝えられる。上記の果樹園の成立過程に関するルソーの叙述には、一部、このビオトープのコンセプトを想起させるものがあるのではなからうか。

最後に「田園」だが、トリベがあげる『告白』には「かなり高い二つの丘にはさまれた…小さな谷…その底を小川が石や木々をぬって流れ……築山になった庭、…ブドウ園、…果樹園…小さな栗林…泉…山へ登ると…小さな牧場がある」（『告白』上、320頁）田園⁽¹⁴⁾の描写が見られる。ルソーが「もっとも愛した⁽¹⁵⁾」レ・シャルメットの風景で、彼は「これこそ幸福と無邪気のすみか…わたしの生涯の、短い幸福の時……真に生きたというる資格をさずけてくれた」（『告白』上、320～321頁）ところと言っている。

トリベがあげた以上の四つは、いづれも異種の個物的自然が混在（合）的な態様を示す集

合的自然だが、これらに共通する点は、どれもルソーに幸福感を与えるトポス（場所）であることであろう。これは後述する“トポフィリア”のルソー版でもあろう。ルソーはこうした平和でやさしい集合的自然の描写によって自己のみならず、彼のいわゆる“水晶のように透明な心”を持つ人間にとっての理想郷を示唆しようとしたのではなかろうか。

ウ 全体的自然

全体的自然のイメージは、ルソーにあってはまず、「水の流れと鳥の歌声に取り巻かれた大地」には、動物界、植物界、鉱物界から成る「自然の三つの領域の階調（l'harmonie des trois régnes）」（『夢想』、110頁、O.C., t. I, P.1062）があり、それらが生々とした魅力に満ちた自然の光景を織りなしているという観察にあらわれている。彼は次にこうした調和を持つ「大地の表面から、自然のあらゆる存在へ、万物の普遍的秩序へ、すべてを包容している理解しがたい存在者へと…観念を高める」（『マルゼルブへの手紙』、『エミール』（下）、309頁）。またルソーは、はじめて時計の内部を見た人のように「宇宙を構成している存在がそれによってたがいに助けあっている内密の対応関係をみとめる」（『エミール』（中）、139～140頁）。そしてこの宇宙は規則正しい、一様な不変の法則に支配されて運動しており、位置的自然の「天上」の区分で見た天体の運行は、実はこの結果であることを知る。また天体は生命のない物体なので、時計の運動が自発的な運動でないように、「なんらかの意志が宇宙を動かし、自然に生命をあたえているものと信じる」（『エミール』（中）、136頁）。そして「地球が廻っているなら、それを回転させている者の手が感じられる」（『エミール』（中）、135頁）。またこれらが一定の法則に従って動いていることから「ある英知」、「能動的な、ものを考える存在者」がはっきり感じられる。宇宙の秩序は「至高の英知」（Une suprême intelligence—O.C., t. IV, P.579.）の存在を示しており、「宇宙を動かし、万物に秩序をあたえている存在者……をわたしは神と呼ぶ」（『エミール』（中）、143頁）としている。ここでは、形而下的な機械論的宇宙観が、形而上的な、神の宇宙論的存在証明を生み出していること、即ちルソーの自然界の物理的な認識が、自然宗教という抽象観念を生じさせたことがうかがわれよう。実はこの「ある英知」（Une intelligence）の観念は、『エミール』に先立つ十数年前に書かれた「化学論」にあらわれている。

ルソーにとっての全体的自然、即ち世界を構成する各部分がお互いに助け合っている内密の対応関係を持つ自然のもう一つの姿が、彼の生態系の認識であろう。この点はすでに平岡昇により、『不平等論』の翻訳、解説に関連して少なくとも二度にわたって指摘されている⁽¹⁶⁾が、『不平等論』に先立つ約10年前の「化学論」の草稿（1745年～1747年）の中でも述べられている⁽¹⁷⁾。彼は、水分が太陽熱で蒸気となって上昇し、雨になって緑を蘇生させ、土壌が全植物の必要物を根に供給したり、大気から必要な糧を受け取ること、また植物は動物に栄養を供給するが動物の排泄物はめぐりまわって植物を通じて土壌を豊かにすることなど、無機物と有機物または有機物間の相互依存関係を指摘している。ルソーはこれらを「一つのすばらしい経済（une économie admirable）」とか「循環（Circulation）」、「思慮深い交互継起（prudent Alternatives）」などという、いわば生態学的意味を持つ言辞をまじえながら説明し、これらの働きが自然をたえず新しく生まれ変らせているとして、これに気候、寒熱、乾湿の程度などが外部的条件としてかかわると分析している。また彼はこれらの説明に入る少し前に、「万物の能動的原理」は、「一つの知的存在（Un Être intelligent）」で、

この知性は賢明にも「自然の中にけして否認しえない一般的な諸法則を確立し、世界とそこに含まれるいっさいのものの維持を十分満たすだけの結果をもたらした」(A. J. J. R, tome 12, 1918-1919, P. 46) と述べている。そのため、文脈上は、「そこに含まれるいっさいのもの」に生態的自然も含まれると考えてよいものと思われる。

またルソーは、前出のリスボンの大地震についてのヴォルテールの意見に反対する手紙の中で「宇宙の体系において、人類の保存のためには、人間と動物と植物とのあいだに物質の循環が存在することが必要であるなら、その場合には、一個人の特殊な不幸は全体の幸福に寄与します。私が死ぬ、すると私は蛆虫に食べられる。だが私の子供たちや兄弟は、私が生きてきたように生きていけよう。」(前出『白水社全集』第5巻、22頁)と言っている。ここでは「化学論」に見るようなルソーの「循環」という生態学的な知見が、ヴォルテールへの反論の一つの材料になっている。これを前述した、ルソーが自然界の事象の中に自説を補強する材料を求める例の一つにかぞえることもできよう。

ちなみに、今日「土地倫理」の主張などで著名なアルド・レオポルドは「土地は…土、植物、動物という回路を巡るエネルギーの源泉である。……死と腐朽によつてエネルギーはまた土に還る⁽¹⁸⁾」と述べている。

なお、イギリスの自然観の変遷を研究した、キース・トマス (Keith Thomas) は、こうした「自然のバランスという近代的観念は、科学的根拠があたえられる以前には、神学的根拠に依拠していた…生態学的連鎖の概念に先立ち、その基礎となったのは、神のデザインの完全性という信念であり……自然保護論者の強力な主張がこめられていた」(山内昶監訳『人間と自然界 近代イギリスにおける自然観の変遷』法政大学出版局、1997年—以下『自然界』。419~420頁)と述べている。この「存在の連鎖」はライプニッツをはじめ、当時流行した考え方で、生物世界から人間世界までのすべての存在を一つの連鎖とみなす(前出『白水社全集』第5巻、34頁、浜名優美 訳注(14))とのことである。ルソーもポープの詩を紹介し「それぞれの種が、与えられている優越性と完全性の程度に応じて、その位置を占めている、あらゆる存在から構成される連鎖がある」(原好男訳「書簡集」(上)、『白水社全集』第13巻、257頁)旨を解説している。彼はまた「人間よ、…自然が万物の鎖 (la chaîne des êtres) のなかできみにあたえている地位にとどまるのだ」(『エミール』(上)、111頁、O. C., t. IV, P. 308)とも言っている。この「万物の連鎖」の観念は、ルソーの生態学的知見の獲得に一つの刺激となったのであろうか。

以上、ルソーの全体的自然には、それぞれが集会的自然ともいえる、動物界、植物界、鉱物界の三界の階調があり、自然界の物理的法則、動植物など生物間の協同、無機物・有機物間の生態的循環の様相などが含まれるばかりか、これらの秩序の創造者=神の観念がある。またルソーは後述のように、「万有の広大無辺」(l'immensité des êtres『告白』上、232頁。O. C., t. 1, P. 162) という表現も使っている。

なお、上述の「自然宗教」(la Religion naturelle—O. C., t. IV, P. 607) は、自然現象や天文学、博物学、物理学、地理学、化学などとともに、自然宗教教育としてエミールに対するカリキュラムの一つを構成している。

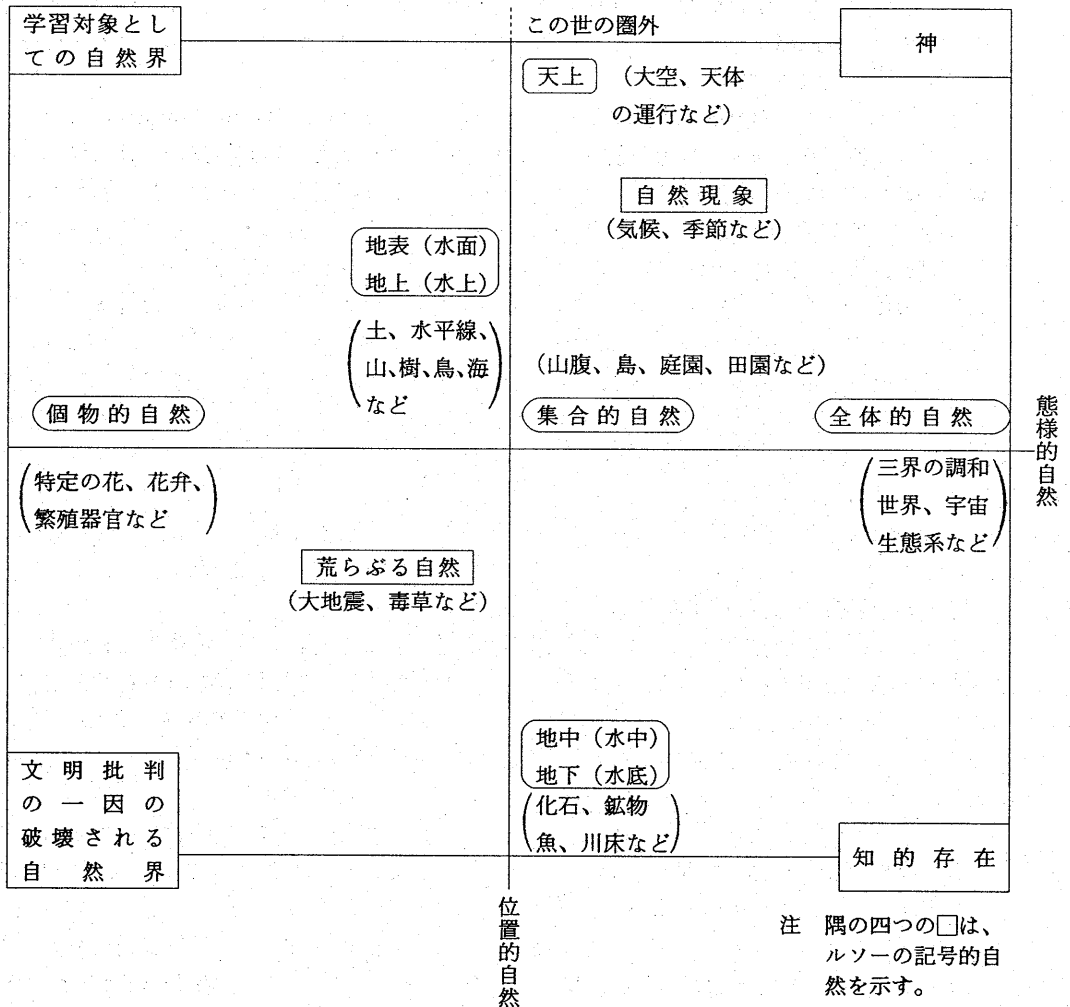
以上、態様の自然の内容の一部を例示してみた。ルソーの次の一文には、彼が個物的自然から集会的自然へ、さらに全体的自然へと、態様の自然を連続的に見透している様子が認められよう。

草から草や、植物から植物へとさまよい歩いて、それらをくらべ、そのさまざまな特徴をくらべてみて、その異同に注意をはらい、こうして植物組織を観察して、これらの生ける器械の動きと営みを追及し、ときにはその一般的法則や、さまざまな構造の原因と目的の探求に成功し、そういう楽しみのいっさいをあたえてくれる者にたいする感謝にみちた驚嘆から生まれる魅惑に浸る。(『夢想』119頁)

(4) 視界の概要

上記の通り、ルソーにおける自然界認識の一端を二軸と各三分区のもとに一見した。両軸を交叉させて、主要な項目と例示事象を簡単に示したものが、次の図である。

図 自然界に対するルソーの視界の広がり
(骨子)



ルソーは「いわば万有の広大無辺の中にわたしを投げこんで……存在するものを結合、選択させ、思いのままに自分にしたがるのである。わたしは全自然を自由に処理する (je dispose en maître de la nature entière)。」(『告白』上、232頁—O.C., t. I, P.162) と述べた。また「誰があえて自然について明確な限界をつけ、人間はそこまでは行き得るが、それ以上は行き得ないと言えるのかね。」(『新エロイズ』(一)、16頁)とも主張している。彼の自然界は、彼の魂の活動の反映であり、その意味では、ルソーにあって自然の諸相を語ることは、自己を語る「告白」の一つの表現形式になっているといえよう。

彼は「視覚はすべての感覚のなかで精神の判断ともっとも切りはなせないものだから、見ることを学ぶには長い時がかかる」(『エミール』上、240頁)と述べ、「いっそう正確な目、しっかりした手、動物、植物、自然の物体のあいだに見られる大きさや形の正しい割り合いについての知識、そして遠近の効果についてのいっそう敏感な経験」(『エミール』上、242頁)の習得を奨めている。ルソーの自然界を見る視覚とはまさにこのようなものであることが知られよう。

R. グリムズレイは「ルソーがその中に没頭することを望んだ光景とは、彼の個性、感覚、感動、宗教的熱望が要求するすべてを満足させることができるものでなければならなかった。それゆえ彼は、おびたしき、多様性・豊かさ、コントラストがはっきりしている土地に身を置くことを好んだ」(A. J. J. R, tome 39, 1972年～77年, P. 55.)と述べている。ルソー自身も『新エロイズ』の主人公が住む場所の条件の一つとして「地形の対照、ゆたかで変化にとむ風景、感覚を魅し、心情をゆりうごかし、魂をたかめる秀麗荘厳な全景」(『告白』中、237頁)をあげている。またグリムズレイは「ルソーが風景をかくも魅力的に見るのは、自然が無垢と純粹の観念 (l'idée de l'innocence et de la pureté) を示唆するからである。彼は常に無垢の魅力に魅惑されていた」(A. J. J. R, tome 39, 1972年～77年, P. 50)とも言っている。

ルソーの自然界描写にはこのほかにも人跡の見えない断崖の下に工場があるなど「野生の自然と人間の技術との…混じり合い」(『夢想』、123頁)という自然と人為の境界的空間や「三界の階調」など、異種の調和、それに迫害に疲れたルソーをやさしく包みこむ「万物の母のふところ」(『夢想』、115頁)、「なによりも安らかな静けさ」(『夢想』、126頁)などが登場する。これまでの管見の範囲で言えば、ルソーは、少なくとも前出の荒らぶる自然と後述の幾何学式デザインの庭園のような人工化された自然の二つをのぞく、自然界の万相を愛したといえるのではなかろうか。

II 近代初頭のイギリスにおける自然観とルソーの自然界

以上、ルソーにおける自然界の諸様相を一見した。ところでルソーとほぼ同時代のイギリスの自然観はどんなものであったろうか。これは仏・英の自然観比較、あるいは18世紀ヨーロッパにおける自然界と人間という大きなテーマになり、到底この小稿の残りの紙数でカバーできるところではない。今回はとりあえず、この比較がどんな結果を示すかを例示的に確めるため、イギリスの自然観の変化を大量の史料を博搜して探求した一書により瞥見してみたい。

それは前章でも引用したキース・トマスの『人間と自然界』である。

1 山岳観

「頂上からの眺めを楽しむということだけのために、山というものに登った最初の人⁽¹⁹⁾」はペトラルカ(1304~1374)だとのことであるが、ある研究ではヨーロッパにおける山岳観の変化を「神の住まう場所、地球の滑らかな体にできた醜いば、崇高な自然、風景、保養地及び観光地⁽²⁰⁾」と要約している。

トマスによれば17世紀中葉までは、おおむね山々は「不毛で《醜いもの》、《疣》、《おでき》、《化物じみた突起物》、《大地の屑》、《自然の恥部》と忌み嫌われてきた」(圈点原著者『自然界』、391頁)。しかし1760年代でのエディンバラのある講演では「精神を高揚させ崇高な気持ちに昇華させる自然の光景」として「雪を頂く山、静寂に包まれた湖、年ふる森林、岩にくだける滝」(『自然界』、391頁)があげられるなど、18世紀中葉までの「一世紀かそこいらで最高の美的賞讃をえる対象にまで変貌をとげた」(『自然界』、391頁)。この劇的变化の背景には、山岳が、草などつねに有益なものを人間や獣に提供するという有用性の認識(1621年)や「人間の目に悦ばしい多様性」を持つという主張(1635年)、それに神の被造物の一つとしての山について「神のデザインの正当化」を図る神学者の弁護などがしだいに力を増していき、1709年には理神論者のシャフツベリは「野生こそが人間に喜びをあたえてくれる。われわれは自然とのみ共存しているのであって、そのもっとも奥深い内側から人間は自然を見ている」と語るに至った(『自然界』、392頁)。そして「1760年代には心ときめく景勝を求めて湖沼地方、ウィ川渓谷…スコットランド高原へ旅行者が押し寄せてきた」(『自然界』、392頁)。さらに18世紀後半になると自然は「精神的な治癒力も兼備していた」ので、山は「自然美が最高のかたちで現われ、神の至高性を想起させる場」となり、「野生の景観になかば宗教的に心酔するこの現象は、全ヨーロッパ的な…現象」(『自然界』、394頁)となっていったとのことである。トマスは、こうした現象の予言者の一人としてルソーをあげている。

なお、トマスによれば、こうした山岳熱の高揚の一因として、道路やウマ、地図、標識の整備、大型四輪馬車の定期便開設などの交通、観光面の発展のほか、豊かな中産階級が休日登山でほんの少しの危険を味う魅力などがあげられるとのことである。若きルソーのアルプス越えは1728年だが、「フランス文学の中に至高の幸福の場(le lieu de la suprême félicité)としての山を導入した最初の小説⁽²¹⁾」である『新エロイズ』は、「アルプスの麓の小都会に住む二人の恋人の手紙」というタイトルを持って、1760年から1761年にかけてロンドンやパリで発売された。この書が大きな人気を得た背景の一つには、以上のような、醜から美・聖へという山岳観の変化の胎動があり、ルソーは結果的にはこの変化をさらに加速させたものとも考えられよう。

2 庭園観

ルソーの先行研究の一つは、『新エロイズ』には当時の「アクチュアリティ(引用者注「生活に切実なテーマ」)が大幅に取り上げられており」その一つが「庭園論(書簡11)」であるとしている⁽²²⁾。ルソーはこの書簡で庭園の幾何学式設計に反対して「自然は絶え間なく直角定規や直線定規を用いるでしょうか」(『新エロイズ』(三)、145頁)と言っている。

トマスによると、こうした庭園の規格化は、イギリスでは16世紀から17世紀にかけての「土地の開墾が文明の象徴」（『自然界』、385頁）となり、それが耕地や果樹園の定形栽培に及んだとのことである。しかしやがて画一性への反発が芽生え、「18世紀初頭以後、風景式庭園の様式は自然的形態—直線よりも曲線を、そして1740年代になると、開墾と野生を明確に対立させるよりも周囲の田園に微妙にとけこませよう」とし、イギリスは「この《自然様式》で有名になり、風景式庭園がこの国のもっとも顕著な文化的達成の一つとなった……幾何学性とは反対の不定形性がそこでは最大の美的魅力を作り出した」（『自然界』、396頁）とのことである。トマスはまた庭園の脱画一化の一因として、「時代主潮に共感できない一種の疎外感など、をあげることができるだろう……野生の自然の索引力は、反社会的情感の本質的な源泉としてつねに認められる」（『自然界』、404頁）と述べ、これに属する者としてルソーの名をあげている。またプロテスタントの聖職者たちなどが「定期的な独居こそ精神に望ましい状態だと…推奨しはじめ…17世紀中葉以後、この孤独への欲求は、詩的テーマとしてしだいに顕著になり」（『自然界』404頁）、18世紀後半のルソーの著作などの翻訳によって「大流行し……ヴィクトリア女王が自然風景に深く感動したとき、その最大の特徴としてつねに孤独な場所（圈点原著者）をあげた」（『自然界』、404頁）とのことである。また彼によれば、イギリスの実業家の中には景観を破壊する開発によって得た利益で、風景式庭園や緑地帯などを作る者が居たが、それは彼らにとって「私的感性を楽しませる……人工のオアシスであり、理想世界の覗き穴で……一般社会の基本的諸価値との根本的対立を強く明示してくれた」（『自然界』、433頁）ものとなった。

こうした18世紀初頭以後のイギリスにおける庭園の脱幾何学式设计や自然界の中へ孤独な場所を求める欲求は、同時にルソーのテーマでもある。『新エロイズ』における「自然の一切の魅力が、封じ込まれている」「孤独な場所」の「エリゼ」はその具体的イメージを如実に伝えている。それは「人工のオアシス」ともいえるが、その設計は人工の跡が全く見えないように完全に自然化することが人間の手によって可能であるが如くに描かれている。この場所は「理想社会の覗き穴」とも考えられ、文明社会の中でも人間は本来の自然善性を取り戻すことができるという『エミール』や『社会契約論』のテーマを、人為を尽すことによってかえって「自然の快い姿を見る」ことが可能な庭園という形で自然界の中に示そうとしたものとも思われよう。ルソーはここで、完全な自然は完全な人為によって作り得るというパラドックスへの自信を示唆しているようでもある。

3 動物観

トマスは、西洋は「動物資源…に例外的に高度に依存している点で、…早くから特異な社会」（『自然界』、26頁）であった。また17世紀後半のイギリスでは、人間の、他の生物に対する無比性を説く声が高く「人間と獣とのあいだには完全に質的な差異があった」（『自然界』、41頁）。最下級の労働者は「家畜に君臨し…自分が社会階層の最底辺にいるのではないと安心させ…てくれた点で農場の動物は、一種、最下等の階級にはかならなかつた」（『自然界』、65頁）と言っている。動物への残虐行為はヨーロッパの各地で見られ、その中で有名だったのが「ほかならぬイギリス人自身」であった。一方動物への残虐行為は悪だとする考え方はプルタルコスのような古典古代の作家以来あり、「神の被造物を虐待する人間には神が復讐するだろう」（『自然界』、225

頁)との見方も宗教界から起きていた。また動物にも感性や人間よりは劣るが理性を持つという考え方も勢いを増してきた結果、「動物に対して不必要な苦痛をあたえ、暴虐を加える資格は、人間にあたえられていない」(『自然界』、226頁)という考え方が一定の勢力を持つに至った。1745年には「動物が、人間の卑しい奴僕となるために作られたなどとは考えず、われわれの同類として尊敬と敬意を払うべきだ」と力説する人たちがあらわれたが、すでにそれ以前の「17世紀後半になると人間が食用として動物を殺す権利はひろく再検討を迫られ…ピュタゴラスの肉食にたいする道義的非難は…翻訳のおかげで広く流布しはじめていた」(『自然界』、440頁～441頁)。そして18世紀末のロマン主義の時代には「動物は、たんなる《獣》、《野獣》から、《中間の獣》、《必死の仲間》、《同類》をへて、最後に《友》、……《兄弟》へと昇格していった」(『自然界』、258頁)と、トマスは言っている。

一方ルソーはすでに拙稿⁽²³⁾でも指摘したように、動物における感覚、憐れみの感情、観念とそれを組み合わせる能力の存在を主張し「人間はこの点では禽獣と量の上で違いがあるにすぎない。」(『不平等論』、52頁)と述べている。また感性の存在が動物と人間に共通のものなので、動物は人間によって「無用に虐待されないという権利」(『不平等論』、32頁)を持つはずであるとしている。また彼は「エミールは……二匹の犬をけしかけて噛み合いをさせるようなことを…けっしてしたことがない。…こういう平和の精神は、……他人を支配することや他人の不幸のうちに喜びをもとめるようなことをさせなかった教育の結果だ」(『エミール』(中)、89頁)と言い、エミールへの教育効果が彼の動物の扱い方にまで及んでいることを述べている。またトマスが述べたピュタゴラスの肉食批判も『エミール』の中でプルタルコスからの引用という形で示している。この中には、「きみはまず、動物を殺し、ついでそれを食い、いわば二度その動物を殺している」(『エミール』(上)、266頁)との一節も含まれている。ルソーのこうした動物観は、おおむねトマスが説く、18世紀のイギリスの新しい動物観と同じトーンを持っており、近代初頭における動物に対する新しい感性を代表する一つと考えてよからう。

なおトマスは17世紀末の科学者たちは「動物の階層性」を論じ、一般には自然界全体が天使—人間—動物などの「社会階層的等級で秩序づけられている、と…臆断されていた。」また、この「自然種の階層性は人間の社会的不平等を正当化するためにひきあいだされた」(『自然界』、80～81頁)と述べている。ルソーは、前出の二匹の犬の話につづけて「青年を冷酷にし、感覚をもつ生き物が苦しんでいるのを見て喜ぶようなことをさせるのは、一種の虚栄心(vanité)が、自分は利巧(sagesse)だから、あるいはえらい(superiorité)から、そういう苦しみからはまぬがれていると考えさせるからだ。」(圏点は引用者による。『エミール』(中)、89頁、O.C., t. IV, P. 545)と言っている。圏点をつけた一節には、人間の社会的不平等の正当化につながる自然種の階層性の意識を人間の虚栄心の作用に帰そうとするルソーの考え方があらわれているようにも思われる。

4 植物観、森林観など

トマスの語るところによると、「17世紀後半までに植物学は医学のたんなる一部門ではなくなろうとし、植物は今やそれ自体のためにしだいに研究されるようになってきた」。植物を「可食性、審美性、有用性、道義性……から判断するのではなく…植物の内在的な特質……花や種子部

の配置や形態にもっぱら注意が向けられた」、「新しい知覚様式」が試みられたが、これらは「植物の理解のうへで革命的なことであった」（『自然界』、89頁）。また16世紀から19世紀の間に花卉栽培が「社会的に華々しく発展し…花卉園芸が巨大な規模に広がっていった……つまり《園芸革命》」（『自然界』、337頁～338頁）が起きた。「異国の植物栽培は、何もイギリスに限らず、全ヨーロッパ的な現象だった」（『自然界』、342頁）。そして「花はしばしば女性の独壇場…、専有物視され……19世紀初頭では、とりわけ若い女性には植物学が似つかわしいと一般にみなされていた」（『自然界』、361頁）とのことである。

以上の変化をルソーに引き付けて考えてみると、彼の植物観は審美的であると同時に、内部構造にも目を向けるという二面性を持つことに気がつく。また彼の「植物学についての手紙」は、「ドレッセル夫人とその四才の娘…のために勉強の手ほどきをする」目的で書かれたものである。この著作の邦訳者が「これは、博物学、なかでも植物採集の趣味が市民階級の日常生活に浸透している事態を示すことがらである」（高橋達明訳。前出『白水社全集』第12巻、151頁）と解説しているのは、上記の変化をふまえてのものであろう。

また森林観については、野蚕や未開を意味する「sauvage」の語源の「silva⁽²⁴⁾」、つまり森林は「1500年から1700年のあいだに…樹林がすさまじい勢いで減少した」（『自然界』、292頁）が、しかし減少した森林地帯は「人間の脅威ではなく、その反対に喜びと靈感の貴重な源泉」になり、「1713年に…「森林愛はどうやらわれわれの本性に植えつけられた感情らしい」と述べ」る人もあらわれた。「18世紀後半には……繊細な感性の人の多くは、都市の発展、森林の破壊、農業の発展……をみても、もはや喜びとは感じられなくなっていた」（『自然界』、319頁、430頁）し、「孤独と瞑想の場としての森林観は、自然のなかに宗教的な力がはっきりと秘められているという、新しい考え方によってさらに強化された」（『自然界』、325頁）。

以上の森林観の変容からルソーを見ると彼は『不平等論』で農業の発展による森林の破壊を批判したことで、18世紀ヨーロッパの「繊細な感性の人」の一人でもあり、またサン＝ジェルマンの森の中での「瞑想」（*méditations*—『告白』中、175頁、O.C. I., P. 389）により『不平等論』のテーマの靈感を得たことは、18世紀の森林観の変化の中での一つの出来事としても理解できるのではなかろうか。

なおトマスは、「田園にたいする郷愁の本質的な要因として、自然物—木や花…を幼年時代の貴重な思い出に結びつけ……自然物は、……よく幼年時代の記憶を即座に生き生きと呼びさましてくれるのだが、それというのも、自然物は、人間とちがって、個物としてではなく類として感知されるからにほかならない。たとえば、1本のサクラソウを見ると、子供のころみた同じサクラソウをすぐさま想起できるだろう」と書いたある随筆（1814年）を引用している（『自然界』、382頁）。

ルソーもまた幼少期の田園生活で「田園を愛する気持はたいへん強く、これは終生消えなかった」（『告白』上、22頁）と言っている。また前述のように散歩中偶然見つけた「ツルニチニチ草」が一瞬のうちに若き日のヴァランソ夫人との幸福の記憶を「即座に生々しく呼び起し」てくれたのは、この「類」としての作用が働いたからなのであろうか。上記のトマスの引用文は、ルソーの言説の解釈に示唆的なものを含んでいるように思われる。

以上トマスに全面的に依拠して、17～18世紀のイギリスにおける自然観の変化とルソーにおける自然界の諸相を例示的に比較してみた。これらの結果から言えることは、さらに広く類書を吟味して17・18世紀のヨーロッパにおける自然界に対する考え方の変遷の中にルソーを位置づけて、

その関連を検討し、ルソーがその変遷の中から何を不得、何を与えたのかをさらに明らかにする必要があるということである。これまでの管見の範囲では、この点については上述した「山岳観」、「庭園観」それに女性による植物愛好の流行との関連がわずかに言及されている程度であると思われる。ルソーにおける自然界の見方の独自性とその社会、政治、教育思想との関係などをより広い視野からとらえ直すことが、今後の研究課題の一つになるものと思われる。

III 現代の「自然と人間」観と

ルソー：バイオフィリアとトポフィリア

1 バイオフィリアとルソーの自然界認識

前章4の森林観のところで「森林愛はどうやらわれわれの本性に植えつけられた感情らしい」との発言(1713年)を引用した。社会性昆虫の研究などから「社会生物学」を提唱した、E.O. ウィルソンは今日、「人間の本性に関する研究成果は、ある種の環境倫理」に「強く、かつ新しい支援」をもたらしたと言っている。即ち「バイオフィリア (biophilia) という…生きものの多彩さに喜びを感じてしまう自然な傾向」または「ある種の自然環境…に魅力を感じてしまう傾向」で、これは「自然の保護・愛護に、新たな、深い理由を提供」する「社会生物学的な概念⁽²⁵⁾」とのことである。またこの概念は「生命もしくは生命に似た過程に対して関心を抱く内的傾向」とも定義され、その意図は、「生命に親しみ、探求するという営為は、精神の発達と深く関わる複雑なプロセスである⁽²⁶⁾」ことを示そうとするとところにある。

この「バイオフィリア」という言葉は、現代の環境論では「生物に対する先天性愛着」と邦訳されることがある。この先天的愛着心は「人類の精神的・肉体的進化の上で重要な役割を果たし……人間…の知的、精神的、あるいは美的な達成のために、多様な生物の存在は不可欠である」とする仮説で、「生物多様性保全の哲学的基盤⁽²⁷⁾」になるものと説明されている。ウィルソンはこれによって「これまでむしろ倫理的な視点から語られることの多かった自然保護の問題を、生物学の視野のなかに取り込むことに成功し……さらに人はなぜ生物に魅かれるのか…といった問題にまで、議論の射程を伸ばしている⁽²⁸⁾」と評されている。

この「バイオフィリア」仮説は、これまで見たようなルソーの上に、よく適合するとの感が免れえないところであろう。自然は彼の「思索のもっとも力強いバネ」としてその知的成長を助けた。また、自然界の諸相を深く感じ、回想し、想像し、実利的観点を排して、その社会的意味をも把握しようとするルソーの営みは、独自の思想を育て、その精神的発達と不可分のものであったといえよう。さらに幼少時から自然美に親しんだ彼の感覚は、自然体験が増すにつれて、植物の内部構造の微妙な美しさからアルプスなど大自然の崇高美までを深く感じ、表現する審美的感性を磨き上げていったものと考えられる。またルソーは「数限りない驚くべき光景の多様さ、偉大さ、美しさをご想像ください。自分の周囲には全く新しい対象、見知らぬ鳥や奇妙な未知の植物しか見られない喜び、言わば別の自然を観察する喜び、新しい世界の中にある喜びをご想像ください。こういう物のすべてが見る者の眼に名状しがたい一つの混合を示し、その魅力はさらに空気の純粋さによって増すのです。」(『新エロイズ』(一)、127頁)と、生物種の多様性が有す

る溢れるばかりの生命感を生々と語っている。自然界にはカントが指摘する如く、破壊的、攻撃的側面がある。しかしルソーの空間世界は本質的に善であり、その世界は、彼固有の自然である「本質的善性」(la bonté essentielles)を享受させたとの指摘もある(A.J.J.R, tome 39, 1972-1977, P.64)。この本質的善性の観念の起源の一因に、彼の生物に対する先天的愛着(バイオフィリア)をあげることができるかもしれない。

ルソーの伝記を書いた、J.ゲーノは、「キリスト教が何世紀ものあいだかくも豊かでありえたのは、現世を越えた神への復帰という観念で人々の魂を満たしてきたからに他ならないが、これと同じように、この人間の善性という観念は、かつて人々が幸福と正義を体験したことがあると確信するようになればいっそう強く、幸福と正義への郷愁を人々の心にいだかせることができたのであった。」(宮ヶ谷徳三訳『白水社全集』別巻1、270頁)と述べている。また前出のウィルソンは、「現在進行している問題で、修復するのに数百万年もの歳月を要する唯一のものは、自然環境の破壊による遺伝子および生物の多様性の損失である。この愚行についてだけは、子孫たちはわれわれを許してくれまい。」と言い、「未来の世代のために配慮することは、およそ人間にできるかぎり最高の道徳的営為だ」と主張⁽²⁹⁾している。我々が推進している今日の自然保護運動には、この未来世代のための道徳的意義が含まれていようが、2世紀前に文明化が環境破壊をもたらしつつあることを指摘するとともに、生物種の多様性が持つ生命力の魅力を強く訴えたルソーは、この自然保護運動に、2世紀後に至るまでなお生きつづけた人間の自然本来的な道徳的善性のあらわれを見出すのではなからうか。

2 トポフィリアとルソーの「場所への愛」

上記の「バイオフィリア」仮説は、「地理学者イー・フー・トゥアン(段義孚)の「トポフィリア」概念に触発されて生まれたものと思われる⁽³⁰⁾」と評されている。トポフィリア(topophilia)とは、著者によると「物質的環境と人間との情緒的なつながりをすべて含む」もので、「人が場所に対してもつ感覚である⁽³¹⁾」。これは「環境保護運動の初期の段階に考えられ書かれた⁽³²⁾」とのことであるが、邦訳では「場所への愛⁽³³⁾」と訳されている。またその具体例は、自然への審美的な感覚や人間的で感情に満ちた出来事の記憶を担った場所・環境への愛情、それにヒマラヤなど巨大で荘厳な大自然から受ける啓示的な崇高美の感覚などである。そして若くて健康な人々が美しい朝の自然の景観を目にした時に感じる興奮のような「宇宙の生命がわれわれを親しきで包み込むように思われる瞬間⁽³⁴⁾」もその一例である。さらに著者は人間の想像力に強く訴えてきた自然環境として、人間に飲食物など生活の糧を用意する森林、海岸、谷、それに大陸から隔離され、純潔で幸福かつ無垢な、島の四つをあげている。

ルソーには、今までも例示したようにこうした「場所への愛」に満ちた描写が多数認められる。「ツルニチニチ草」は、かつてそこで幸福だった自然空間の記憶を想起させ、巨大なアルプス山脈とポー河が見える高い丘から眺める崇高で啓示的な自然美は、助任司祭の自然宗教の「話の証人…真实性を保証」するものである。またエミールの「想像力を揺り動かそう」とする「もっとも有利な場所」の一つとしてポー河が流れる谷があり、二人をとりまく「岩、森、山々」は二人の「約束の記念碑に指定」(『エミール』(中)、239頁)される。さらに「若くて、元気で、健康にみち……生きているこの魅力が、全自然をわれわれの目に美化する」(『告白』上、84頁)とい

うルソーの感性や、水流と鳥声、大地の観想による全自然と自己との陶酔的な同化の感覚、田園や島などへの強い愛着など、ルソーの作品における「トポフィリア」の例証には事欠かない。

彼の手になるさまざまな自然界の描写は、自然体験を乏しくしつつある我々に向って、改めて人間に本来備っている、自然界に対する豊かな感性やその諸相を深くとらえうる活力の再自覚を促しているようでもある。

18世紀、美しい自然界の諸相を生々と伝え、生態系と環境問題の存在を指摘したルソーは2世紀を経て、現代の自然保護運動を支持する側に立つ先人の1人として再評価されるものと考えてよいのではなからうか。

結び

かつて中村雄二郎は「自然」というのはもともと無限定なもの……だからどういう形でも捉えられるし、また、どういう角度からもとらえられない⁽³⁵⁾と述べたことがある。この自然をルソーのように感覚的に感じられる自然界と考えると、この意味の自然は人間を含む感覚的存在が感じるままに規定されるとともに、他の感覚的存在による別の規定の可能性をたえず残すことになる。一方自然はカントも言うように、いかなる特権的存在も認めていない。現在人類はウィルソンが述べる如く、地球上の無数の生命の多様性を損いつつある。人類による地球環境の破壊が、人類自らを滅すほど進行したとしても、大自然=地球生態系は、現在の我々が知らない、巨大な復原力=自己修復能力を発動することで、自分自身にとっては短かい時間にすぎない数百万年を費しても、再び自己=地球生態系を修復していき、その過程でもしかすると、極度の地球環境破壊を抑制する遺伝情報(本能)を荷った、現在の人類とは別の知性的存在を産み出すかもしれない。またあるいは聖書の物語が伝えるが如く、神が人間を創り出したことを一度は後悔したように、人間のような知性的存在は二度と登場しないような自己修復過程が進むかもしれない。

上記の中村の発言には、未来の大自然に関するこうした自由な想像を許容するところがあるのではなからうか。

注

- (1) ルソーの原著全集は、*Œuvres complètes*, Bibli. de la Pléiade, 5 vol., 1959-95。本文中の原語引用は、以下O.C., t. II, P.441などと記す。また書簡集は、*Correspondance complète de J.-J. Rousseau*, édition critique par R.A. Leigh, Institut et Musée Voltaire (Genève) et puis Voltaire Foundation (Oxford), 1965-。以下C.C., tome 1, P.95のように記す。また*Annales de la Société Jean-Jacques Rousseau* (ルソー協会年報) (Genève) は、以下A.J.J.R.t. 39, 1972-1977, P.518などと記す。
- (2) 坂本百大「環境記号論—そのポストモダン」、日本記号学会編『感覚変容の記号論』(記号学研究17, 1997年)、185頁。
- (3) 野田又夫「カントの生涯と思想」責任編集野田又夫『世界の名著39 カント』中央公論社、1998年、30頁。

- (4) イマヌエル カント著原 佑訳「判断力批判」『カント全集』第八巻理想社、昭和44年、387頁。
- (5) 桑原武夫編『ルソー』岩波書店、1962年、101頁、94頁。この引用部分を含む第5章は、多田道太郎 執筆。
- (6) Georges Van Den Abbeele, *Travel as Metaphor From Montaigne to Rousseau*, University of Minnesota Press, Oxford, P.110.
- (7) 荒井宏祐「J.-J.ルソーにおける「自然」・「社会」・「環境」認識と「環境教育」をめぐる考察序説」、『文教大学国際学部紀要』第8巻、1998年3月、5頁～6頁。
- (8) 荒井宏祐「J.-J.ルソーにおける自然空間の諸相と「化学論」に見る生態学的認識—研究序説—」、『文教大学国際学部紀要』第10巻第1号、1999年10月、57頁～58頁。
- (9) 荒井宏祐「J.-J.ルソーにおける、自然環境の認識と社会的ジレンマ問題—考察序説」、『文教大学国際学部紀要』第9巻第1号、1998年10月、5頁～8頁。
- (10) 前掲(5)、97頁。
- (11) *Etudes rousseauistes et index des oeuvres de J.-J.Rousseau*, Slatkine, 1977～。
- (12) この語には他に「九天の彼方に」(佐々木康久訳『白水社全集』第2巻、371頁)や「この地球をとりまく大気圏外」(中川久定訳「至高の意識と魂の肉体からの離脱の感覚—ルソーの『孤独な散歩者の夢想』」『現代思想』Vol.2-5,1974年5月、165頁)などの訳がある。
- (13) D.E.アレン著/阿部治訳『ナチュラリストの誕生—イギリス博物学の社会史』平凡社、1990年、86頁。
- (14) 前掲(5)でもここを「田園」の例として挙げている(100頁)。
- (15) 前掲(5)99頁。
- (16) ①『不平等論』の解説(282頁—1972年2月)、同訳注140—4(243頁) ②「反ロゴスの予言〈現代人ルソー〉の面貌」『現代思想』Vol.2-5,1974年5月、203頁～204頁。
- (17) 前掲(8)63頁～66頁。
- (18) アルド・レオポルド 新島義昭訳『野生のうたが聞こえる』講談社、1997年、336頁。
- (19) 野島秀勝「風景とロマン主義—「閉ざされた庭」と開いた庭」『現代思想』Vol.7-16,1979年12月、44頁。
- (20) イー・フー・トゥアン著 小野有五・阿部一共訳『トポフィリア—人間と環境』せりか書房、1995年、405頁。
- (21) R.Trousson et F.S.Eigeldinger *Dictionnaire de Jean-Jacques Rousseau*, Honoré Champion, Paris, 1996,p.22.
- (22) 桑原武夫「ルソーの文学」桑原武夫編『ルソー研究』第二版、岩波書店、1968年、310頁。
なお、カレット・エクボ著、久保貞・上杉武夫・小林祐一訳『風景のデザイン』(鹿島出版会、昭和61年)にも16世紀～18世紀にかけての、イタリア、フランス、イギリスにおける、庭園観の変容が述べられている(23頁～30頁)。また、景観の世界通史ともいえる内容を扱っている次の著書にも同様の叙述が見られる(162頁～245頁)。ジェフリ&スーザン・ジェリコー著、山田学訳『図説景観の世界—人類による環境形成の軌跡』彰国社、昭和55年。
- (23) 荒井宏祐「J.-J.ルソーの「環境思想」を探る」文教大学湘南総合研究所紀要『湘南フォーラム』第2号、1997年、99頁。
- (24) *La grand Robert de la langue Francaise* par Alain Rey, Dictionnaires le Robert-Paris,1996,

Tome 8, P.606.

- (25) E.O. ウィルソン著 岸由二訳『人間の本性について』築摩書房, 1997年, 8頁。
- (26) エドワード・O・ウィルソン著 狩野秀之訳『バイオフィリアー人間と生物の絆』平凡社, 1994年, 7頁～8頁。
- (27) 西田隆義「生態系と生物多様性の破壊」高月紘・仲上健一・佐々木佳代編『現代環境論』有斐閣, 1996年, 79頁。
- (28) 前掲 (26) 狩野秀之「訳者あとがき」251頁。
- (29) 前掲 (26) 193頁, 192頁。
- (30) 前掲 (28)。
- (31) 前掲 (20), 160頁。
- (32) 前掲 (20), 10頁。
- (33) 前掲 (20), 小野有五「訳者あとがき」441頁。
- (34) 前掲 (20), 170頁。
- (35) 前掲 (16)の②, 197頁。